
静謐

なまはげ秋田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静謐

【Nコード】

N9585B

【作者名】

なまはげ秋田

【あらすじ】

静謐Ⅱ静かで落ち着いていること、またはその様子。

邂逅

15歳になって間もなく、初陣に出た。

勝利を得、戦後処理が始まると、一人で戦場を歩いた。戦いの後には何が残のか、自分の目で見たかったから。

供はいない。嫡子たる王子が三人いるから

庶子の自分を気遣う者などディパンには居ないのだ。

陣からあまり離れていない場所に一本の大本を見つけた。

血の匂いが立ち込め、薄暗くなった中、そこを目指しながら歩き始めた。

しばらく歩くと真っ直ぐに立つ人影と、それに重なる光が視界に入ってきた。

重なる光で女性だとは判ったが、横顔は黄昏色に溶け込んでよく見えない。

胸に両手をあて、うつむいて微動だにしないシルエットは一体、誰なのか確かめようと近づいた。

彼女の前には息絶えた戦士が横たわっているようだ。

まさか！「戦乙女？」声が出ていた。

胸に当てていた手の中の光が

彼女の中に溶け込んでいく様子をその場で見つめる。

「私が見えるのか。」彼女がつぶやく。

「貴女は戦乙女なのか？」

「シルメリアだ。」

言うと、飾り羽根の付いた額飾りを頭から取り、こちらに向き直る。「私が見えるという事は、エインフェリアの資質ありということだ

な。

ディパンの次代では、無理からぬか。」

何を言っているんだ？次代？資質？？

「エインフェリアになるのか？」

自分でもひどく冷静に声が出た。

くすり、とシルメリアが笑った様な気がした。

「名は？」シルメリアは自分の方に向かってゆっくりと歩きながら問いかけてくる。

「ブラムス。」名乗りながら、前方に目を凝らす。

次第に姿が見えてきた。

蒼穹の鎧は晴れ渡った天空だ。その天空にかかる黄金の髪は太陽か。瞳は・・・緑色だ。大地を覆う命の色。

――――

選定された魂は、現世で最後にこの世ならぬものを見る。

美しく、荘厳な存在を。

古い詩の一節が脳裏にうかぶ。

「ブラムス」戦乙女の透明な声を聞いた瞬間、

ぞくり、と鳥肌が立ち、捕まった、と自分の中で誰かが呟くのを聞いた。

次は捕らえる、必ず。激しい感情は、一体何なのか、誰のものなのか。

不思議な感覚が一瞬の内に体の中を駆け巡った。

「自分次第だ。いくら資質があっても、輝く魂とならねば意味が無い。」

シルメリアは自分の前に立っていた。

「今は、まだ連れて行けぬな。

人として、その時、その時を精一杯生きろ。

嬉しい事や哀しい事が、沢山お前に降りかかるだろう。

色々な感情を、時には一人で受け止め、時には他の者と分かち合え。強い自分も、弱い自分も受け止められる者となれば、逝く時に魂が輝く。

その光が戦乙女を呼ぶ。」

「私が逝く時、シルメリアを呼んだら？」視線を外さずに訊いた。

微笑みながらシルメリアは私の頬に右手で触れた。

私より頭一つ分、背が高いんだな。

自分の目の前にいる彼女を見ながら、なんとなく思った。

シルメリアの額が自分の額に重なる。

「ブラムスが逝く時、戦乙女が私であったなら、会いに来よう。」

大切な、約束の時。

その時が一瞬なのか、永遠だったのか、当時はわからなかった。

召喚

ブルームスは一人で謁見の間に居る。

少し前に、隣国の使者との通商交渉が終わり

しばらく考え事をしたい、と家臣達に言ったからだ。

あれから20年以上経ったか・・・。

色々な事があった。

嫡子である王子達と王弟一派の権力闘争。そして、王位継承者達の急逝。

望んではいなかった王位継承者の儀。

前王の死後、自分を傀儡にしようとする貴族達との権力闘争。

国内の混乱に乗じた周辺諸国との戦い。

そもそも、自分の立場は強いものではなかった。

弱者たる強者として、ディパンを治める。

戴冠式の時、そう誓った。

国内が安定した頃王妃と出会い、そして王子が誕生した。

今また、その王妃が新しい命を宿している。

喜び、哀しみ、愛情、憎悪。

様々な感情の中を自分は一生懸命に生きている。

シルメリアの云う「輝く魂」に少しでも近づいただろうか。ふと思った。

出会ったときの様に、窓の外は黄昏色に染まっていた。

「ディパンの王か？」冷たい声が広間に響いた。

「誰だ？」問いながら、一つの言葉が頭をよぎる。

―戦乙女―

謁見の間、中央に現れたその姿は、漆黒の鎧をまとっていた。
ヴァルキリーは三姉妹。「上か。」

「いかにも。」口の端に笑みを刻みながら、彼女は剣を抜き近づいてくる。

「エインフェリアとなれ！」言うが早いか斬りかかってきた。
とっさにかわし、身に帯びた剣を抜き応戦する。金属音が広間に響き渡る。

「上は問答無用でエインフェリアにするのか！」

「人として名誉な事だろう」

「だが断る！」

戦乙女の眉間が険しくなった。

「お前に選択権など無い！」

――――

剣を交えながら、ブラムスは一つの言葉を思い出した。

「ブラムスが逝く時、戦乙女が私であったなら、会いに来よう。」

シルメリアはそう言った。「逝く時」と。

だが、目の前の戦乙女は剣で、力で、「逝け」というのだ。

何だ、このやり方は！！強い嫌悪、激しい怒りが湧く。

金属音は途切れない。

騒ぎを聞きつけ家臣達が広間に入って来た。

「チッ」戦乙女が舌打ちをする。

「王！」「近衛兵を呼べ、早く！！」「不屈き者が、剣を収めよ！」
喧騒の中、ブラムスは叫んでいた。

「貴様の選定など断じて受け入れんぞ!!」

漆黒の兜の中の顔が、怒りに染まる。

「オーディン様の命だ! 嫌でもエインフェリアとして召喚する!!」

広間の空気が凍りつく中、戦乙女は渾身の一撃をふるってくる。
来る!! ブラムスは身構える。

「陛下!!」視界の隅に叫びながら駆けつけようとする王妃を捉えた。

「来るな!!」今、お前の命は一つではない、と
王妃の身を案じ、気を取られ僅かな隙が生じたその時――

一瞬だった。視界には広間の天井が広がっていた。
不思議と痛みは感じない。

剣といえど所詮はモノだ。最後に残るのは我が身のみか。
手から剣が落ちた音がひどく耳障りだった。

「後を追う事は許さん。」自分の声を聞いた。

天井は徐々に暗くなり、

王妃の泣き叫ぶ声が遠くなっていく。

大丈夫だ。我が子達は、母と国を支えるだろう。奇妙な確信を抱いた。

全身の力が抜けていく。

だが、ブラムスは倒れない。

「最後まで、膝を折らぬか。」戦乙女の気配を感じた。

戦乙女。15歳の時の出会い。蒼穹の鎧、黄金の髪、緑の瞳。

私はあの時、シルメリアに選定されたのだ。オーディンではない。
会いに来る、と言ったのは蒼穹だ。漆黒ではない。

我が身が人でなくなっていく中、そう思った。

捕縛

「エインフェリアを一人、シルメリア直属の配下としろ。」

戦乙女として転生したシルメリアへの、オーデインの最初の命令だ。

「昔、オーデイン様自ら選定し、アーリィ様が召喚したのだが。」

「召集には一切応じない。オーデイン様がヴァン神族との戦いに引っ張りだそうとして

神格の低い神族を何度かけしかけたらしいが、返り討ちにあったとの噂だ。」

「力があるだけに、扱いかねている状態なのだ。」

異端児だ。

剣は使わずに、拳で戦う。自らの体を武器とする戦い方など、一人を除いた神族はしない。

人間にもいないわけではないが、絶対数が少ない。

「消失は恐れない。戦士でありながら魔法にも造詣が深い。

そこいらの神族よりも強いだけに、タチが悪いわ。」フレイはそう言った。

消失させるには惜しい力を持っているという事、か。面子という理由もあるだろうが。

長い廊下を歩きながらシルメリアは思う。

オーデイン様のやり方は、いつもこうだ。何事に対しても「支配」しかない。

ヴァルキリー三姉妹のみが、人間の魂をエインフェリアに出来る。エインフェリアとなってしまうたら、神の時を生きる。

それは永遠にあるか、消失するかという直線的な時の流れをいう。

神の時から、生と死を繰り返しながら円を描く時の流れ、

人間の輪廻の輪に乗せるのが「エインフェリアからの解放」であり、これを意図的に行えるのは、全神族の中でシルメリアしかない。

似たような事は、オーディンも行える。戦乙女に対して。

戦乙女は自分の意思で転生できない。

いつ転生して、どのくらいの長さを戦乙女として在るかは、全てオーディンの手の中だ。

主神であるオーディンは自分の能力を良く思っていない。それも知っている。

実際、解放をめぐって何度か意見を異にした。

今回も、解放する気などさらさら無いくせに、それを餌に「支配」しろという事だ。

納得出来ない。だが・・・。

主神の命に対して「否」という返事は、ヴァルハラには無いのだ。苦い思いが、シルメリアの眉間に皺を寄せさせた。

一つの扉を開く。神族は伝令以外、エインフェリアのもとになど、出向かない。

アーリイとレナスはどうしているかは知らないが

シルメリアはエインフェリアに対して、伝令は使わない。

自分の足で赴く。

エインフェリア達がざわめいた。

――――

近くにいるエインフェリアに声を掛ける。

「例のエインフェリアは何処にいる？」

一切の召集を拒否しているとの話だ。今回は無駄足になるかも知れない。

「シルメリア様、奥です。」にっこり笑って、奥の扉を指し示す。
「会えるか？」更に問いかける。

「末ならば会う、と我らは聞いてます。」
意外な返事が返ってきた。

「扉の向こうの、一番奥の部屋です。」

「ありがとう。」礼を言って扉へと向かう。

見下す事をせず、自分達と同じ目線でいてくれる。

ヴァルハラに居るエインフェリア達にとって

それがどんなに嬉しい事か、彼女は知らない。

エインフェリア達を、ある意味掌握している、という事か。

オーデイン様やフレイが何とかしようとする訳だ。

薄暗い廊下を歩きながら、シルメリアは思った。ここは自分も初めてだ。

多分、例のエインフェリアが許可しなければ、入れない場所なのだろう。

「入るぞ。」扉を開く。中は廊下より更に暗い。

まるで人間界ミッドガルドの「黄昏時の様だな。」

扉を後ろで閉じながら、言葉が口にでた。

一番奥で椅子に腰掛けていた人影が、ゆらりと動く。

成る程。

確固たる意思と力は、確かに尋常ではない。

しかし、何か、引っかかる。懐かしい感覚、波動。

「戦乙女か？」こちらに向かってゆっくり歩を進めながら、人影は訊いた。

この魂は、まさか！！

「シルメリアだ。」答えながら、一つの情景が脳裏にうかんだ。

「名は？」あの時と同じ言葉を口にしていて自分がいる。

「ブラムス。」知っているくせに、と相手が続けて言ったような気がした。

左手に抱えていた額飾りが、足元で乾いた音を立てる。

昔、黄昏時に会ったディパンの王子。真っ直ぐな魂と瞳。

シルメリアは頭を取り巻く光を見た。王の印。ディパンの次代となる者。

ブラムスが、ディパンの王になったかどうかは、知らない。出会った後、間もなく自分は転生したから。

長い時が経ち、当代の戦乙女として、自分はここにいる。

そして、今また目の前にいるその姿は、

すでに15歳の時のものではなくなっていた。

シルメリアはブラムスを見上げる。

二人の視線が交差した。

――――

変わっていない、うす茶の髪と瞳。

そして王の印。

ヴァルハラではオーディンが、

ヨツンヘイムではスルトのみがその印を持つ。

人間界ミッドガルドに生き、王たる条件が揃っている者ならともかく、

エインフェリアになれば、治めるべき国など無い。

だから、ブラムスに王の印が見えることはありえない。

なのに、シルメリアには、ブラムスにそれが見える。

無冠の王、それは・・・。

「私は、会いに行かなかったからな。」

ブラムスの瞳を見ながら、シルメリアはつぶやいた。
苦笑いを浮かべるシルメリアの頬に右手を当て、

「遅くはなったが、来てくれた。」ブラムスは言った。

表情を改め、シルメリアは目の前のエインフェリアに問いかける。

「ブラムス、今なら間に合うぞ。」

お前を解放したい、言外に続けた。

ブラムスとして、オーディンに歪められた人生を

新たな生として転生し、取り戻して欲しい。

生きてシルメリアを見ることが出来た人間は、皆無ではない。

しかし、言葉を交わしたのは、一人だけ。

その唯一の存在に、「会いに行く」と約束までした。

こんな歪んだ再会は、あの時の約束を果たした事にはならない。

次はきちんと果たしたい、だが。

その時の戦乙女が、自分である保障はどこにも無いのに。

ひどく自分勝手な感情だな、と自嘲気味に思った。

もうひとつは、不死者王の望み。

かつては敵として何度か対峙し、戦った。

かなりの間、行方知れずになっている。

滅したとも、封じたとも聞いていない。

転生した理由は、当人のみが知る事だ。

だが、不死者王が望んでそうした、ということはシルメリアにも判断がつく。

例え不死者王であろうと

魂が解放を望むなら、叶える。

無冠の王たるもの、それは不死者王。

しかし、こうも見事に転生していたとは。

何度か転生を繰り返し、元の波動を消したにしても、何かしら痕跡は残る。

最初の転生を完璧に、もしくはそれに近い形で行わないとヴァルハラを目をかくぐる事は不可能だ。

しかも、エインフェリア候補として目を付けられ、無理矢理召喚されている。

鮮やかなものだ、とシルメリアは素直に感嘆する。

ブラムスにその自覚があるかは、わからない。

だが、ヴァルキリーであり

何より過去にブラムスと強い因果を結んだ

自分だからこそ、王の印が見える。

シルメリアは冷静に状況判断をしていた。

オーデインを筆頭にヴァルハラの子族達は

誰一人、この事実はまだ気付いていない。

エインフェリアの今なら、自分が解放して、輪廻の輪に乗せる事が出来る。

解放の絶対条件は、エインフェリアとの同意。

頼むから。

シルメリアの額に、ブラムスのそれが触れた。

うす茶色の瞳は文字通り目の前にあり、微笑んでいる。

「私は、シルメリアに選定されたのだ。」

低い声が答えを囁き、続ける。

「一瞬であり、永遠のこの時を、待っていた。」
ブラムスが目を閉じた。

瞼の下に隠れた瞳は何色なのか、もう見えない。

シルメリアも目を閉じる。

選択はなされたのだ。

ならば――

「私と共に在れ。」

因果が再び結ばれた。

両方の頬に、ブラムスの手が重なっていた。

「捕らえたぞ、シルメリア。」

額が、熱い。

低くて、静かで、激しいその声を、当代の戦乙女は聞いた。

三部作 第一部・終

回想

ヴァルハラから離脱する。

ヴァルハラから人間界ミッドガルドへの干渉が頻繁に行われている。もう少し、人間界から離れていたかったが、状況がそれを許さなくなっていた。

長い時をオーディンと戦った。

相手は一方的に仕掛けてくる。

十重二十重に策を弄し、不死者王の消失を図る。

いい加減、飽いた。

オーディンとの戦いと、ヴァルハラから人間界への干渉で

人間界ミッドガルドの歪みが看過できない状態になってきていた、という事もある。

歪みは無数の小さな亀裂だ。

それは、「疫病」「争乱」「異常気象」といった様々な形で現れる。

自分が人間に転生する事で、歪みの原因の一つは無くなる筈だ。

亀裂は、少しずつではあるが、修復されるだろう。

転生している時間が長ければ長い程、修復の時も長くなる。

だが、ここ最近のオーディンの干渉は、度を越している。

潮時だ。これ以上ヴァルハラに居る意味が無い。

人間に転生し、エインフェリアとしてヴァルハラに来た。

まさか、自分がエインフェリアになるとは。

運命とは数奇なものだ。

母親は赤子を産んだ事で豊かな生活を手に入れ、我が子を顧みない。そんな親子を周りは卑下し、晒い、誰も相手にしなかった。

多くの人間が居る広い城で、いつも一人きりだった。暗い孤独の中で出会ったシルメリアは、一人の人間として少年と向き合った。

15歳だった少年が、その出会いを一筋の光として生涯大切にしていたとしても、仕方ないか。

ブラムスは自分が最後に転生し、王となった少年の記憶を思い出していた。

「ブラムス。」シルメリアの口から出た名前は、少年にとっては、初めて存在を認めて呼ばれたものだった。と同時に、「真の名」になった瞬間だ。

――――

神族は、自分の名を自分自身で与える。命名者に支配されない為に、不死者王「ブラムス」は通称で、「真の名」ではない。

持つ必要が無かったし、不死者王に対して、命名者になれるだけの力を持つ者などいない。

不死者の中でも力ある者、特に他者からの干渉を極端に嫌う魔術師などは密かに自分自身が命名者となる。

「真の名」は諸刃の剣だ

支配という明確な意思を持って名を与ようとする。

すると、相手は抵抗して、跳ね返そうとする。

自分が相手より勝っていれば、命名者として支配できる。

相手の力との差が大きければ大きいほど、それは容易だ。

だが、自分が相手より劣っていれば、確実に跳ね返しにあう。

そうになったら、跳ね返った「真の名」が自分のそれになる。

相手は命名者となり、自分を支配されるのだ。

力ある者達にとっては、剣を用いない戦いでもある。

支配を意識せずに「真の名」を与える事が出来るとは。しかも、人間相手に。

人間は「真の名」を持つ存在ではない。

彼等は「通称」で一生を終える。

輪廻の輪に乗り、短い生と死を繰り返すが故に、持つ意味がないのだ。

例えオーデインでも命名者にはなれない。

存在を認めてもらえた事が、少年にとってそれほど大切な事だったからか。

「真の名」を持たない不死者王の魂が転生したからなのか。

人間に、「真の名」を与え、命名者がシルメリアとは。

ブラムスは口許に笑みを刻む。

あれが関わると面白いことが起きる。

退屈せぬな。私を楽しませてくれる。

「真の名」を口にしたのは一度だけだから、

命名者たる自覚がシルメリアにあるかは知らない。

だが、ヴァルハラから離脱しようとしている今、

彼女に命名者の自覚があれば、自分を「縛り」に出る可能性はある。

人間がエインフェリアとなったのだ。「真の名」は有効だろう。

もし「真の名」を呼ぶような事があれば、跳ね返す。

不死者王にそれが有効かどうか、試すのも一興だ。

例え我が身がエインフェリアであっても、

私を支配しようとする者は、誰であろうと容赦しない。

黄昏色の部屋に扉を閉める音が残った。

――
――
――
――
――

「人として、その時、その時を精一杯生きろ。

嬉しい事や哀しい事が、沢山お前に降りかかるだろう。

色々な感情を、時には一人で受け止め、時には他の者と分かち合え。

」

シルメリアの指し示した道。

人としての在りようを示した道は、王の道となった。

邂逅さえ無ければ、エインフェリアとして目を付けられる事も無く、次の命に転生していただろう。

短い生を人間は、華やかで残酷な色と共に、駆け抜ける。

薄暗い廊下を無表情で歩きながら、ブラムスはふと思った。

だから、戦乙女は人間に転生している時の記憶を持っているのかもしれない。

人間でしか知りえない人生の色。

その色をどう受け止めるかは三者三様、まさに戦乙女それぞれだ。

部屋の扉を開く。シルメリアの呼び出しは無い。

エインフェリア達が視界に入ってくる。

人間として、一人一人違う色の人生を生きた者達。

オーデインの、ヴァルハラ有意向で召喚された者達でもある。

全てを知る事が不幸なのか、知らない事が不幸なのか。

その答えは、ブラムスも知らない。

「呼び出しは無いはずですが？」

近くのエインフェリアが怪訝そうな表情で聞いてくる。

オーデインの人間界への干渉による歪み。

彼等もその現れだ。

最後の扉に手をかけ、ブラムスは告げた。

「ヴァルハラから出て行く。」

対峙

「そのエインフェリア、止まれ！」

「誰か、シルメリア様に注進を！早く！！」

「エインフェリアの分際で、いい気になるな！」

「貴様の思い通りにはさせんぞ！」

口々に叫びながら、神族達は次々と襲いかかる。

「私の邪魔をするな。」

倒れていく神族を見ながら、煩わしそうにブラムスは言った。

まったく、無駄な事をするものだ。

今迄の不満が噴き出したか。

理由はどうかあれ、私に向かってくる者には、倒す。

ブラムスの視界にエインフェリア達が映る。

彼等は遠巻きに見るだけで、

ブラムスに手を出そうとはしない。

そうだ、お前たちは手を出すな。

私に関わる事は消失を意味するぞ。

蜂の巣をつついた様な騒ぎの中、

ブラムスは宮殿の外へ向かう。

ビフレストへと。

「来い。」緑を踏みしめながら、ブラムスは言った。

私を選定したのは、お前だ。

あの出会いがあったから、エインフェリアとしてヴァルハラにいる。

「共に在れ」とお前は言った。だから、共に在ったのだ。

シルメリア直属の配下として、常に側に。

その事実を快く思わない神族達を黙らせるだけの結果は出てきた。

異端者だ、お前は。

エインフェリアの意思を尊重する。決して道具として扱わない。だから、あの時、私を解放しようとしたのだろうか？

不死者王と知っていながら。

人と神、エインフェリアと神、そして不死者と神。

私とお前との因果は、生易しいものではないぞ。

運命の女神自らが結んだ因果だ。

あの邂逅で、お前は私を捕らえた。

だが、私の選択を受け入れた事で、お前は私に捕らえられたのだ。複雑に絡み合う因果。

その因果を断ち切ろうとするのなら、

そしてこの事態の收拾を図ろうとするのなら。

お前は、私を止めねばならんぞ、シルメリア。

――――

さわさわと風が吹く。緑を、ブラムスの髪を揺らす。

「止まれ。」鋭い声がブラムスの背中を突き刺す。

シルメリアの気配。

お前は、私が思った通りの戦乙女だ。

ブラムスはゆっくり振り返る。

出会った時と変わらない、蒼穹の鎧、黄金の髪、緑の瞳。

「誰も手を出すな。」

離れた場所に居る神族達、エインフェリア達を制しながら、鋭利な刃物で裂く様に、戦乙女は此方に向かって来る。

自分の目の前に立ち、静かな声で告げた。

「勝手は許されんぞ。お前は、解放を拒んだのだからな。」

「止めるか？」片方の眉を吊上げ、悪戯っぽく笑いながらブラムス

は問う。

「無論だ。」不敵な笑みと共に、シルメリアは剣を抜いた。後方を横目で見やり、厳しい面差しで言葉を投げる。

「我等の闘いだ。重ねて言うぞ、誰も手を出すな。」

誇り高き、戦乙女。

ひとたび戦いとなれば、自ら先陣に立ち、剣を振るう。

周りから見れば、雄々しい戦乙女だろうが、

自分にしてみれば、エインフェリアを守っている様にも見える。

それは支配される者の悲哀を知る故か？

だが、ヴァルハラに属する神である以上、ヴァルハラのだてに従う。

だてを破ろうとするエインフェリアは、葬る。

その先にあるのは魂の消失。

召喚した者の責務として、神族としてだてを遵守する。

そういう厳しさも持ち合わせている。

私を解放しようとしたのもお前なら、葬ろうとするのもお前だ。

「強い自分も、弱い自分も受け止められる者」

お前は静かな表情の下で、自らの思いとオーデインの思惑の間で一人苦悩する。

それは15歳の少年が味わった孤独と同じなのか。

「ブラムス。」剣を構えてシルメリアは呼びかけた。

お前にとって私はブラムスなのだな。

出会った時の、解放しようとした時の。

そういう事か。

ヴァルキリーとして私とやり合う気だ。

エインフェリアの自分相手なら、互角だろう。

命名者として「縛り」にかけ、成功すれば、勝機が増える。己が命名者と知りながら、勝因になり得る一つを捨てるか。気に入ったぞ。運命の女神、戦乙女の末。

「シルメリア。」

二人の姿が交錯した。

「エインフェリアは、どうなると思う？」

「消失すると思われます、オーデイン様。」

「誰がそうする？ フレイ。」

玉座で神が言葉を交わす。

離脱

シルメリアの剣がブラムスに斬りかかる。

避けながらブラムスはシルメリアの喉元を狙う。

拳が宙を割り、黄金の髪が踊る。

次の攻撃に出る。拳と剣が互いを狙う。二人の足元で緑が悲鳴を上げた。

一進一退の激しい攻防が続く。

「いつから自覚した？」シルメリアの問いに

「わからぬな。」短く答える。

戦士としての、意地が、矜持が互いに牙を剥き、相手を喰らおうとする。

「何故、解放しようとした？」自分の問いに、

「わからぬな。」シルメリアは言った。

やはり面白い。

お前は、私の中の様々な感情を呼び起す、稀有な存在だ。

空気を裂き、鋭い拳を繰り出す。

拳は剣の腹で受け流された。ブラムスは距離を取り、隙を窺う。

空気が張り詰めた。

「誰も手を出すなと言った！！」

シルメリアの声と同時に、静寂は破られた。

鋭い声とともに、シルメリアは横に現れた歪んだ空間に、光子を放つ。

ぱりん、と光の破片が砕けフレイの足元に散る。

「シルメリア！」非難するフレイの声。

黄金の髪が、陽炎のように揺らいでいる。

選定者としての、戦士としての誇りが、他者の介入を許さない。
無言でフレイから視線を離し、剣を構え直すシルメリアをブラムスは見ていた。

事態が膠着したら、フレイが出てくる。思ったとおりだ。

次で全てが決まるぞ。

オーデイン、貴様はどう出る？

――――

その対峙は長かったのか、短かったのか。

刃の様な一陣の風が二人の間を駆け抜けた。

と、同時に二人の足が地を蹴る。

剣が煌めきながら、襲いかかる。

真っ直ぐに向かってくる剣を両手で受け止め、地面と水平に倒す。

シルメリアは切り返そうとする。ねじ伏せる。

私は譲る気はない。お前もだろう、シルメリア。

二人の闘気がぶつかりあった。

火花が散る音。それが徐々に激しくなり、炎が燃えさかる音となる。

二人を取り巻く空気は緑を引き千切りながら円を描く。

シルメリアが剣を切り返した。ブラムスがそれを嫌い、厳しく弾く。

剣を弾かれた勢いで体勢が崩れた戦乙女の左手首をブラムスが掴む。

「シルメリア、いずれお前は引き裂かれるぞ。」

言いながらも一方の拳を鋭く繰り出し鳩尾を狙う。

「仕方あるまい。」

シルメリアは剣をすくい上げ、阻み、斬りつけようとする。

そうはさせまい、と剣を握っている手首も掴む。

ブラムスとシルメリアの闘気は、互いに引かないが故に、激しさを

増す。

それは猛り狂いながら、因果のように二人を取り巻き、絡み合い、螺旋を描き、上へ上へと昇る。

ブラムスは自分の両肘を後ろに折り、運命の女神を引き寄せた。自分の胸元で驚いた表情を浮かべる戦乙女を見下ろす。

「なら、私が奪ってやろうか？」

シルメリア、お前がお前で無くなる前に。

笑みの刻まれた口の端から、鋭い犬歯の先端がのぞいた。

「覚えておこう。」

不死者王の真紅の両眼を見上げながら

シルメリアは答える。口許の微笑と共に。

二人の闘気は、一種の力場となっている。

下手に介入すれば、衝撃が拡散する。

その勢いに乗じて、ビフレストを抜け

エインフェリアが神界から脱走するという、前代未聞の事態になりかねない。

フレイも迂闊に手を出せなかった。

どちらかが制するか、あるいは相打ちか。

機を計っている中、エインフェリアの気配が変わった。

この圧倒的な気配！

「不死者王！」フレイが叫ぶが早いか、オーデインは一閃を螺旋目掛けて放つ。

お前の事を一番理解しているのは、私だ。

そしてシルメリア、お前はその事を知っている。

「ブラムス！」シルメリアが叫んだ。白い閃光が二人の姿を飲み込む。

三つ巴の力は拡散しながら辺りを襲い、猛烈に駆け抜ける。

フレイは予期せぬ事態に、防御が精一杯だった。次の瞬間にフレイの目に映ったのは、暴走する衝撃を受け止め、制御し、宙に放つ戦乙女。放たれたそれは、金切り声をあげながら一直線に上空を目指す。神界の結界を破り、次元の壁を越える。ビフレストではなく、こちらか！フレイは苦々しく思った。

――――

拡散する衝撃をを抑えようと、シルメリアは全身全霊で力場を抑えた。

額飾りが吹き飛び、肩当が弾き飛び、前方に繰り出した両腕は小刻みに震えた。箆手は砕ける。掌は、熱と圧力で撥ね返されそうになった。

制御出来たものは、天空に放つのが精一杯だ。制御しきれなかった衝撃は、地を這い、空気を伝い、神族やエインフェリアを吹き飛ばした。

呼吸を整え、立ち上がったシルメリアに向かい、フレイが歩み寄る。

「シルメリア、あなた気付いていたの？」

「何の事だ？」

「とぼけないで！あのエインフェリアが不死者王だって知っていたんでしょ！！」

「フレイやオーディン様が気付かぬ事が、私に判る訳がない。」表情を変えずに戦乙女は答えた。

痛烈な皮肉。フレイは思わず手を上げる。頬を叩く音が鳴った。横を向きながら、シルメリアはくすり、と笑った。

「何がおかしいの。」

微笑を湛えて、シルメリアがゆっくり向き直る。

「いや、同じ台詞をフレイお気に入りレナスが言ったら、

どう反応したのかな、と思って。」
フレイの表情が凍りつく。

フレイの横を通り過ぎながらシルメリアは言った。

「結果としてはあの様になったが、

さっきの状況では、私としてはあれが精一杯だ。」

そう、貴女の判断は間違っていないわ。

暴走する力場を抑えた。あそこまで出来るとは、正直私も思っていないかった。

衝撃を空に放たねば、ヴァルハラ被害は甚大だったでしょう。

でも。

オーデイン様の心証を悪くしたわ。

「以前から、私はよく思われていない。

だが、私は神族だ。ヴァルハラは掟は遵守する。

その上で、私に利用価値があるから、オーデイン様は私を使役している。」

振り向いたフレイに、遠ざかるシルメリアの後ろ姿は、そう言っていた。

一閃を放ち、事態を観ていたオーデインは玉座に座った。

人間に転生し、その事実気付かず、エインフェリアとして召喚していたとは！

しかも神界から脱走しただと！？

赦さんぞ、不死者王。貴様は、ヴァルハラに不死者の影を落した。

オーデインは前を見据え、無言で両手で玉座の肘掛を掴む。

その眼は怒りで暗く燃えていた。

――――

紅い両眼は振り返らず、人間界ミッドガルドを目指す。

エインフェリアの器であれば、不死者のそれよりも

オーデインの放つ衝撃による身体的被害は少なくて済む。

そして、オーデインの一撃は、結界と同じ神界の波動だ。

結界の反発を受けず、力は一方的に結界を衝く。

不死者王の力を用いるよりも、破り易くなる。

ブラムスがヴァルハラで最後に見たのは、光に包まれるシルメリア。

おそらく無事だ。あれは甘くは無い。

そしてヴァルハラに属する自分の立場をわきまえている。

オーデインがその上で自分を利用している、という事も承知している。

下手に手を出そうものなら、逆に火傷を負う事になるだろう。

結界を抜けながら、エインフェリアの器を捨てる。

人間としての時は終わった。

次元との摩擦でブラムスの身体は暗い焰に覆われた。

不死者王の時が再び動き出す。

三部作 第二部・終

竜玉

雨の中の平原にシルメリアは立っていた。

戦いが終わり、呼び出したエインフェリア達を自分の中に呼び戻す。

足元には、魔術師数人と剣士が転がり、

離れた所にも、魔術師と弓闘士が倒れている。

シルメリアの両手は、紅い竜玉を支えている。

あちこちに流転するドラゴンオーブをやつとの思いで探し当てた。

オーブは、常に秘されていなければならない。苦勞するはずだ。

だが、最後の在り処を突き止めた時、

持ち出した理由に、愕然とした。

魔術師達が持ち出していたのだ。

人間界を支える至宝を、己の欲の為だけに。

オーデイン様は、この事を危惧されたのか？

いや、それだけではない筈だ。

オーブを見ながら、シルメリアは思案を巡らす。

――――

「ドラゴンオーブの行方を探し当てよ。」

オーデインの命令。それは何を意味しているのか。

何か、ある。頭の中で警鐘が鳴る。

「ですが」と口を開いた戦乙女の質問を、オーデインは片手で煩わしそうに遮る。

「エインフェリアの刷新も同時に行う。

解放を求める者、シルメリアが解放したい者を連れて行け。」

「・・・承知致しました。」返事をする、シルメリアは一礼して

退出した。

戦乙女が退出した部屋で、主神とその腹心が会話をする。

「よろしいのですか、オーディン様。」

「シルメリアが、適任だ。」

「ですが。」

「私への忠誠を試す、いい機会だ。」

あの脱走劇の後も、シルメリアは当代の戦乙女としてヴァルハラにいる。

オーディンによる見せしめか。

「前代未聞の事態を引き起こしおって。」

「エインフェリア一人御せぬとは。」「無様な戦乙女だな。」

「上二人が見たら、呆れ果てよう。」

彼女を快く思わない者達、

口さがない神族達の言葉が、事あるごとにシルメリアに突き刺さる。

シルメリアは、今迄通り振る舞い、主神の命を遂行していた。

「少しは、申し訳なさそうにすれば、可愛げもあらうに。」

廊下ですれ違った神族の一人が、吐き捨てる様に言った。

ドラゴンオーブの探索。

当代の戦乙女としてのの、おそらく最後の命だ。

これが終われば、転生する。当分、戦乙女として王に呼ばれる事は無いだろう。

ひよっとすると、永遠に戦乙女としての自分は無いかも知れんな。

だが、オーブ探索とは。我が主神は、何を考えているのだ。

シルメリアは、オーディンの真意を計りかねていた。

今は、何も考えまい。

とにかく人間界ミッドガルドに降りてオーブを探し当てる事が先決だ。

――――

雨が降る。

ドラゴンオーブの紅い胎動を見ていたシルメリアは我に返った。とにかく、これを在るべき場所へと安置しなければ。それで自分に下されたの最後の命令も終わる。そう思って踵を返した瞬間、シルメリアの背後に雷が落ちた。

「オーブを神界へ持ち帰れ。」オーデインの冷たい声。
今、何と聞こえた？オーブを？？

「ですが！オーブが失われると、人間界が崩壊します！！」
「私に意見するのか？」

落ちる雷と共に、オーデインの声が響く。
「しかし！」

「主神の命に、逆らうのか？小賢しいぞ、シルメリア。」
複数の雷と共に、冷徹な声が轟く。

「たかが、下級神が、大層に主神に意見するとはな。」
侮蔑は雨と共にシルメリアを叩く。

「解放と、オブジェクトリーディングの能力が無ければ、
戦乙女などと持ち上げられる事も無かっただろうに。」

シルメリアは硬直した。

「選べ。私の命に従うか、私に逆らってオーブ隠匿するか。」
嘲笑を含んだオーデインの声が聞こえた。

雨、雨、雨、そして雨。

暗い空を閃光が走る。

彫像の様に立つシルメリアの顔を、雨の筋が幾本も伝う。
額を抜け、頬を滑り、顎から落ちて地面に還る。

「オーデイン様。」

「フレイ、私は言っただろう？ 忠誠を試す、いい機会だと。」

「オーブがこちらに來ると、人間界が……。」

「シルメリアは、餌だ。」

オーデインの酷薄な笑み。

「人間界からオーブが失われる事を好しとしない、

紅い眼をした猛獸を誘き出す為のな。」

フレイが更に問う。

「不死者王を？」

「あれ程の力を持つ者を、放ってはおけぬよ。竜玉の代わりとする。」

「シルメリアは、どうなさるおつもりですか？」

「まだ利用価値はある。当分、転生させておけばいい。

使う機会が無ければ、永遠にな。」

ヴァルハラの意味は、今、示された。

闇の中で、低い声が呟いた。

「お前では、支えられまい。」人間界も、お前自身も。

人影は、椅子からゆっくり立ち上がる。

不意に現れた暗い焰が王を覆い、

ふっ、と消えた。

閃光

シルメリアは、立ったまま、動けなかった。
オーデインの自分に対する意思表示。

「王呼の秘法」に似た「解放」を行える自分。
主神は目障りなのだ、自分が。解かっていた。
だが、神族として、神界の掟は遵守してきた。
自分が納得いかない命令も、遂行した。
全ては我が主神の為。

その主神は、自分の思いを忠誠を測る道具にした。
道具。私は利用価値があるから使役されている。

「たかが、下級神が、大層に主神に意見するとはな。」
「解放と、オブジェクトリーディングの能力が無ければ、
戦乙女などと持ち上げられる事も無かっただろうに。」

オーデインの言葉が、頭の中でがんがり響く。
足元から、自分の存在が壊れていく。
掌にオーブの胎動を感じた。これが失われれば、人間界は崩壊する。
早くしなければ。でも、身体が動かない。

「寄越せ。」シルメリアの後ろで、低い声がした。
のろのろと、シルメリアの顔は、後ろを向く。

暗い焰が消え、不死者王が姿を現す。
竜玉と同じ紅。闇の胎動を秘めた両眼。
言葉を、声を出そうとして息を吸う。

声が出ない。

「なんて表情をしている。」ゆっくりブラムスが歩み寄る。
崩れそうなシルメリアの後ろに立ち、掌で緑の瞳を覆う。
頭ごと胸に抱え込み、もう一方でオーブを支えようとする。

「悪いようにはせんよ。」頭上で声がする。

シルメリアの肩が上下し、呼吸が荒くなる。

温かい雫がブラムスの掌を濡らす。

雫はシルメリアの頬を伝い、噛みしめた唇の横を通り、幾筋の雨と交わり、顎からぽたぽたと落ちていく。

剣を握る手で、ブラムスの腕を掴む。崩れまいとして。

「お前の選択は、間違っていない。」

シルメリアの視界を覆う手がそう言った。

――――

オーブの支えは、ブラムスに移った。

「仕掛けるぞ、シルメリア。」

濡れたシルメリアの頭に顔を埋めた不死者王は

優しい声でとんでもない事をシルメリアに告げた。

返事の代わりにシルメリアはブラムスの腕を掴んだ手に力を込めた。今は、自分の感傷よりも、オーブだ。奪われる訳にはいかない。

ブラムスの気配が笑った。応えるお前もお前だ、と。

「無様だな、オーディン。」重厚な声が地を這う。二人のすぐそばで雷が落ちた。

「何と言った。不死者王。」冷徹な声が答える。

「無様だと言った。ドラゴンオーブ欲しさに、人間界に干渉するのは。」

あの魔術師達も、貴様の策だろう？」

「オーブが人間界に在ると、人間どもは利用しようとする。だからヴァルハラで保管する。その為だ。」

「それを人間や下級神の力を借りなければ出来ない貴様は無様以外の何者でもない。」あからさまな挑発。

相手を挑発しながら、不死者王は、竜玉の転送先を固定する。慎重に、細心の注意を払って。

そうしないと、オーブの波動を確実に追跡される。

雷鳴と共に、いらつくオーデインの声が鳴り響く。

「私が出るまでも無い。」雷は落ちない。怒りを抑えているのか。

「そうだな、貴様が出ると碌な事にならぬ。不死者王と気付かず、エインフェリアを神界から逃してしまった様にな。」

不敵な笑みを浮かべながら、不死者王は平気で逆鱗に触れる。

いや、触れるどころか、鋭い爪で容赦なく切り裂いている様なものだ。

オーデインが味わった屈辱。

人間に転生していた不死者王を、それと知らずにエインフェリアとして召喚した。

そのエインフェリアが神界から脱走した。

自分の一閃を利用して。

ヴァルハラを治める神の瞳が怒りで燃える。

「おのれえ……」齒の間から呻く声が洩れる。

「貴様が下級神の間違いではないのか？」

仕上げに不死者王は爪を突き立てた。

「赦さんぞ！不死者王！！オーブの代用品の分際で！！！！」

挑発に乗せられて、オーデインは思惑まで口にした。

そういうことか。

ブラムスの手が離れていく中、シルメリアは全てを知った。

不死者王をオーブの代わりとする。その底にあるもの。

オーデインは不死者王に不覚を取ったことが認められないのだ。

歪んだ復讐だ。オーデインが、自身が味わった屈辱への。

歪み？そう、人間界も歪みが再び起きている。

自分が、エインフェリアのブラムスと共にいた時よりも。

シルメリアは自分の横を抜けていくブラムスの手を鋭い爪ごと握っ

た。

だから、不死者王は転生していたのか。
歪みの修復を図る為に。

「そういうお前を、私は気に入っている。」
前方を睨むシルメリアに、その声は
上空のオーデインの一閃と共に降ってきた。

――――

ヴァルハラから放たれた一閃は唸りを上げ猛烈な勢いで向かってくる。

「来た。」二人は同時に小さく叫ぶ。
挑発の間、オーブの転送先を固定したブラムスが、オーブの転送を始めた。

オーデインは、ブラムスが転送先を固定し、転送するのを待っていた。

転送先を歪める事で、オーブを手にするつもりだったのだ。

だから不死者王が現れた時、手を出さなかった。

不死者王は、転送先を悟られない為に、オーデインを挑発した。

そして竜玉の転送を行う時を、混乱の中と定めた。

オーブを追跡させない為に。

相手はヴァルハラを統べる主神だ。安全策はいくらあっても邪魔にならない。

「しまった!!」フレイが叫んだ。

「遅い!!」ブラムスの背後に廻り、シルメリアの放つ輝く槍が閃光を割る。

守護陣を敷く。転送が終わるまで、邪魔はさせない。

「貴様等、消し去ってくれる!!」

オーデインの掌が更に光を放つ。

畳み掛けるように一直線に頭上に落ちてくる一閃。
守護陣を敷いているから、シルメリアは動けない。

「させるか！」

先程の衝撃で歪んだ空間と力場、拳句の果てに不死者王の波動まで
利用して

無理矢理に軌道を自分の頭上から前方へと捻じ曲げる。

無理な方向転換で、多少なりとも力を殺ごうという

戦乙女の冷静な計算と共に。

「私にも、意地がある！」

剣を抜き、その腹で一閃を受け止め、守護陣を支え、不死者王を守る。

背後の気配を窺う。転送はあと少しで終わりそうだ。

「悪いようにはせぬよ。」とブラムスは言った。

私の身体は、それまで持てばいい。

「生意気な下級神が！！」

解かっている。今更だ。

だが、下級神といえど、守りたいものがある。

「・・・ディン」呻くシルメリア。

神が、人間界の先行きを案じて、何が悪い。

「オーディン！！！！！」

叫びと共に、シルメリアは剣を薙ぎ払い、

受け止めていたオーディンの力を跳ね返した。

「逆らうか！この私に！！」

主神は己が手を高くかざした。

「オーディン様！」フレイの叫び。

帰還・表

オーデインの一閃

三度目のそれは細く、鋭く、本物の槍の様に、シルメリアと、不死者王に突き刺さろうとしている。

軌道を読む。自分の胸を狙っている。

帯同しているエインフェリアと不死者王共々、串刺しにするつもりだ。

どうする？とシルメリアが思った瞬間。

背後の緊張が緩んだ。

守る！

シルメリアの小さな跳躍。

鋭利な一閃はシルメリアの下腹部に突き刺さった。

「！！」

それ以上の進入は許すまい、と両手で一閃を掴む。

自分の身体で緩和しきれない衝撃が辺り一体に弾け飛ぶ。

光、光、光。光の奔流。

無事か！？振り向こうとした時、

シルメリアは王呼の輪に捕まった。

――――

身体が、縛られ、動かない。

上半身は、魂と乖離してしまった。

不安定な場での発動。そのせいで術はのろのろと円を描く。

輪の中から、後ろを振り返る。

魂と一つであった部分が裂け、激痛が走った。

つい先程まで、悪条件の中

全神経を集中して紅い竜玉の転送をしていた。

自分がしたくても出来なかった事を、代わりにしてくれたのだ。

光の中に暗い焰が見えた。

器が失われているのか？！

魂は？！無事なのか？！

「ブラムス！！」

シルメリアの精神体は下半身で一つとなっていた自身の魂を引き裂く。

金色の精神は翻り、不死者王に駆け寄る。

魂を裂く苦痛が精神を支配する。だが、シルメリアは止まらない。

「シルメリア、いずれお前は引き裂かれるぞ。」

ブラムスの言葉。

私の思いと、オーデインの意思は、違う。

私はヴァルハラに逆らった。

私から乖離した魂は、ヴァルハラへと還った。

「仕方あるまい。」

シルメリアの精神は小さく呟くと、

前方にある暗い焰に両腕を伸ばし、引き寄せ、抱きとめる。

輪は、両手を胸に当てたシルメリアの前方で閉じた。

精神の転生が始まる。

何処へ還るのか。

還る場所など、何処にも無いのに。

薄れていく意識の中で

シルメリアはエインフェリア達と紅い胎動を感じた。

――――

「オーディン様・・・。」

「末というのは、厄介なものだな。フレイ。」

無表情でオーディンは言った。

フレイは答えが出なかった。

「シルメリアは・・・。」

あの時、王の輪は二重にシルメリアを取り囲もうとしていた。

守護陣が崩れ、自身が衝撃の最中にいる不死者王の輪は

僅かに発動が遅れ、途中で四散した。

「賢しくも、不死者王の魂を自身の保障とした。」

口許で薄く笑いながら、オーディンは言葉を続ける。

「だが、逆もまた真理だな。何時でもオーブの代用品が手に入る、という事だ。」

「ですが、シルメリアは自身の魂の一部が、精神体と共に在ります。」

「

「魂による神の力の具現化を危惧しているのか？
案ずる事でもなからう。」

「何処に転生させたのですか？」

「ディパンだ。」

転生の軌跡を描きながら、

シルメリアは、邂逅の地ディパンに戻る。

神の歪んだ歯車はディパンで廻り始めた。

帰還・裏

シルメリアがオーデインの一閃を跳ね返した次の瞬間、王呼の秘法がシルメリアを包んだ。

不死者王を封じる事より、戦乙女の利用価値を選んだと思わせる為に。

だが不安定な力場で発動すれば、転生先が安定しない。術の対象者である戦乙女も、危険に晒される。

シルメリアが魂と精神の乖離が始まる前に
エインフェリアの解放を行う。

竜玉の転送を終えたブラムスは、

シルメリアを取り囲む輪に両手を当てた。

昔、自らに施した同じ王呼の秘法で輪の中に滑り込む。

ブラムスの進入で出来た僅かな隙を

エインフェリア達の輝きが通る。

王の輪から逃れ、輪廻の輪を目指す為に。

力場が安定していれば突破に時間がかかるが、

目の前のそれは、違う。不安定な力場に立つ輪は、脆い。

王の輪は、対象者以外の侵入で歪み、軋んだ。

「私はいずれ引き裂かれると言わなかったか？」

精神体の脇を持ち上げ、魂からそっと離しながらブラムスは問う。

同時に、魂が神界へと還る。王の呼び声に応えて。

王呼の秘法。戦乙女にとって、それはオーデインによる支配の象徴か。

「仕方あるまい。」シルメリアが言葉と体を返す。

鋭い爪を持つ手がシルメリアの細い腰に伸びる。

シルメリアは、ブラムスの首に、腕を絡めた。
もう一方の掌で、シルメリアの頭を頬に引き寄せる。
ブラムスは運命の女神を両腕に抱いた。

「私が言ったことを覚えているか？」

「奪うと言ったな、ブラムス。」

「シルメリア、お前がお前で無くなる前に。」

シルメリアの精神体が

微笑みながらブラムスの顔を両手で包み、額を重ねる。

「美しいな、不死者王の瞳は。」

「今頃気付いたのか？遅すぎる。」

くすくす笑いながら、金色に輝く女神はすまないな、と言った。

――――

運命は容赦なく時を刻む。

シルメリアの笑みがゆっくり消えていった。

「私を代わりと為せ。」透明な声がブラムスの耳に響いた。

「知っている。」幾星霜の闇を重ねた、低い声が応える。

シルメリアは、両手をそっと離れた。

優しくブラムスの頭を腕に抱え込み、

残酷な決意が落ちた耳朶に、甘く囁く。

「私の事を理解してくれるのは、ブラムスだけでいい。」

「今更。解りきった事を言う。」

ブラムスの腕に力がこもった。

王呼の輪が、崩れる。

二人の一瞬で、永遠の時の様に。

ブラムスの背後の空間が波紋のように歪んだ。

時が至る。

シルメリアは手をブラムスの肩に滑らせ、優しく告げた。

「愛している。」

「私もだ。」

二人の最後の会話。

この短い言葉を交わすまでに、どのくらいの時が必要だったのか。

運命の女神は、綻ぶように笑うと

するり、とブラムスの腕をすり抜けた。

不死者王の脇を鮮やかに駆け抜ける。

ブラムスは瞼を閉じた。

シルメリアの決意を阻む権利など、誰にも無い。

歪んだ空間から現れたフレイが、封印の呪を放つ。

不死者王の背より前に現れた対象者に、

呪は速やかに、静かに、纏わりつく。

振り向いたブラムスが見たのは、

冷たい結晶の中で微動だにしないシルメリアだった。

不死者王が地面を撃つ。

焰と衝撃が怒り狂いながらフレイに向かって襲いかかる。

ブラムスは結晶に歩み寄り、呟いた。

「奪うぞ。」

防御の最中、フレイが見たのは、暗い焰が渦を巻き、不死者王と結晶を飲み込み、消えていく光景だった。

――――

ブラムスは結晶と共に帰還した。

城は主の帰還を歓び、風と共に低い唸りを上げる。

主は城の最深部、闇より暗い玉座の間で、冷たい輝きを放つ結晶を見つめる。

オーディンは不死者王を封じ、ドラゴンオーブを手にする。

シルメリアは、オーディンの意図を知った。

その底にある暗い思惑も。

歪んだ復讐を諦めない限り、ドラゴンオーブを狙い続ける。

不死者王の眼と同じ色をした竜玉を手にする事自体が

復讐そのものかも知れない。

だから、フレイが現れ、ブラムスに封印を施そうとするのは、判っていた。

シルメリアは、不死者王を庇い、自らを封印させた。

もしドラゴンオーブが奪われた時、自分自身をオーブの代わりとするために。

「私を代わりと為せ。」シルメリアがブラムスに告げた決意はそれの意味する。

神といえど、精神体ではそんな事は出来ない。

封印の結晶と、それが在る場所がブラムス城であれば、不可能が可能となる。

人間界に於いて此処は、様々な力が渦巻く唯一の場所だからだ。

人の一生の様に激しく駆け抜ける地脈、気脈、果ては海流までもが島を取り巻き、

怒濤の如く集い、ぶつかり、新たなエネルギーを生み出しながら荒い力場を成している。

闇を統べる王の城は、

昼は姿を見せず、夜にのみミッドガルドに現れる。

膨大なエネルギーを消費する為に。

人間界に生きるあらゆる存在が活発に活動する昼よりも

大多数が眠りにつく夜の方が、

ミッドガルド自体の波動はおとなしいから城の固定が容易い。

行き場を失ったエネルギーは、ブラムス城によって制御されているのだ。

そのおこぼれに与ろうと、夜の城に不死者達が集う。

複数の力が入り混じる場所故、人間界の変化にも、過敏に反応する。シルメリアは、自らを制御体、封じさせた神界の結晶を伝導体とし、乱雑に渦巻く力のあるべき方向へと導く。

長くは持たないだろうが、ある程度人間界を支える事は出来る。

誰が、猛り渦巻くエネルギーを結晶まで誘導する？

そこまでの力を持つ者は、城の主しかいない。

そして限界の時、シルメリアの精神は、結晶と共に砕け散る。

――――

オーデインはシルメリアの意図にいずれ気付く。

だが、敢えて奪還しようとはしないだろう。

自分の思惑を現実にする為の安全策は、いくらあっても邪魔にはならないからだ。

逆らった戦乙女を手元に置く必要もない。替わりはあと二人いる。

「お前はオーデインの思惑を逆手にとった。」

重厚な声が、結晶を包み込む。

シルメリアがブラムスと共に在る。

それは、ドラゴンオーブの代わりを必要としている、という事だ。

「ヴァルハラを統べる王は、自身の屈辱を受け入れる度量があるのか？」

運命の女神は鋭く問いを投げる。

シルメリアは、オーディンを試しているのだ。
自分が試されたように。

同時に、警告を発している。「ブラムスに手を出すな」と。
もし事が起これば、シルメリアにオーブの代わりをさせることが出来るのは、

四界の中で唯一人、ブラムスしかない。

夜を従える孤城。最深部に座する不死者王。静謐で重厚な闇。

闇に抱かれ、冷たい光を放つ、脆く、儚く、美しい結晶。

それは不死者王ブラムスの守護を受け、同時に守護する運命の女神。

ブラムスは無言で結晶の横を抜ける。

玉座に座り、足を組むと、頬杖をついた。

紅い両眼を瞼が覆う。

結晶は、ふわりと浮き上がり、豪華な天井を目指した。

――――

「美しいな、不死者王の瞳は。」

シルメリアがそう言った真紅の双眸は、
凝った闇の中で、紅い印を刻む。

三部作 第三部・終

帰還・裏（後書き）

FROM 「MIDGARD」 TO 「VALKYRIE」 PR
OFFICE
三部作・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9585b/>

静謐

2011年6月10日21時35分発行